

Passion  
パッション・インタビュー

今回は、留萌ペンクラブ  
代表 湯田克衛さん  
にお話を伺いました。

# 留萌に生まれ、留萌と歩んだ五十年

## いつまでも郷土に こだわり続けるペンクラブ

留萌ペンクラブについて教えてください。

留萌ペンクラブが発足したのは、昭和30年です。戦後の何も無い時代に生まれたため、色々な意味で周囲の期待も大きく、当時は200人の会員がいたこともありましたが、札幌をはじめ道内・道外各都市のほか、ニューヨーク在住の会員もいて、みなさん留萌に縁のある方ばかりなのも特徴の一つです。

どのような活動を行っていますか？

主な活動は、文芸誌「留萌文学」の発行のほか、文学講演会や文学展を開催しています。また、留萌文学の発行の度に合評会お互いの作品を批評し合い、今後の作品の糧にする場を開催しています。

現在発行している「留萌文学」は昭和31年創刊の前身「PEN」を31号から改称して現在に至っています。当時、道内で生まれ、今も続いている文芸誌の中では「留萌文学」が4番目に古い文芸誌です。

今後の目標は？

留萌ペンクラブと「留萌文学」は、これからも地方発の同人誌として、地元留萌への熱い思いを失うことなく、郷土に根ざした活動を続けていきたいと思っています。

これまで、輩出した多くの人材と作品を大切な財産に、これに続く若い年代の書き手を発掘していくことも必要と感じています。

また、留萌を舞台にした小説や詩など一般にはなかなか目にする事のない素晴らしい作品も多く存在します。できれば、それらの作

今年、留萌ペンクラブ設立50周年の記念の年にあたるため、記念号(90号)の発行と文芸評論家木村真佐幸氏を招いて記念文学講演会「一葉・哀切の余韻」を予定しています。これまでも、10年毎の記念の年には、記念号を発行し、多くの年々に寄稿していただけてきましたが、今回は50年という大きな節目ということで、北海道の文学界をリードする作家など、今まで最高の17人の方からの寄稿があり、大変うれしく思っています。

「留萌文学」は、一般の方も手にすることが出来ますか？

以前は、1年に6冊も発行したことがありましたが、現在では1年に1冊のペースで、発行しています。1回の発行部数は350冊で、会員への配布のほか、各地の図書館や博物館、他の地域の文学団体や関係者に寄贈しています。

また、一般の方には、市内の書店での販売のほか、市立図書館にも配布していますので、そちらもご利用いただきたいと思います。

販売価格は千円ですが、原価が三千円ほどかかるため、たくさん発行したい気持ちもある反面、売れば売れば赤字が増えてしまうのも悩みの種になっています。

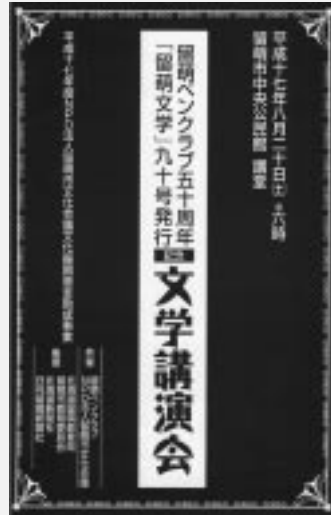
品をとりまとめ、みなさんにご紹介できたらと考えています。

読者へのメッセージをお願いします！

多くの皆様のご支援、ご協力により、留萌ペンクラブは半世紀の歩みが続けることができました。心から感謝申し上げます。

8月20日(土)午後6時から中央公民館において、記念文学講演会を開催します。入場料は無料となっておりますので、ぜひご来場ください。お待ちしております。

『PEN』創刊号(昭和31年)と誌名改称した『留萌文学』第31号(昭和39年)。誌名の改称には総合文化誌から同人誌への方向転換と再出発の思いが込められていました。



留萌ペンクラブ五十周年と『留萌文学』九十号発行を記念した文学講演会を開催します。

講演は、樋口一葉研究の第一人者である木村真佐幸氏「一葉・哀切の余韻 - 生と死のはざままで -」

- ・8月20日(土)夜6時~
- ・中央公民館講堂
- ・入場料無料です。

皆様お誘いあわせのうえ、お気軽にご来場ください。

## PROFILE



湯田克衛さん

留萌ペンクラブ代表  
問合せ  
☎・FAX 0164・43・0164

## 留萌の元気発見! 留萌びと倶楽部



木村 司津さん  
きむら・しず

小さい頃から運動が苦手で、スポーツも好きではなかった私が、スポーツイベントのボランティアにはまってしまうなんて自分でも信じられないことでした。

第1回日本海オロロンライントライアスロン国際大会にボランティア協力した知人から、すごく楽しかったよ、来年やってみたら」と勧められ、翌年の第2回大会にボランティアとして参加しました。ゴールを目指して力を振り絞る選手と温かく支えるボランティアの姿に、あっ、いいなあ」と感動したので、始まりでした。

ボランティアを始めて、色々な人と知り合うことができました。同じエイドの仲間にはこの日の再会を楽しみに、転勤先から毎年駆け付けてくれる人などいます。また、毎回私たちのエイドに立ち寄ってくれる選手との再会も楽しみの一つです。



いつものエイドで選手を応援します!

エイドではみんなそれぞれ自然と役割が決まっています。朝早くから手際よく準備が進められます。周りのボランティアの方々の選手やスタッフへの気配りなど教えられることも多く、日常生活ではできない体験や勉強をさせてもらっています。

ライアスロンには、様々なドラマがあります。大雨で中止になった大会では、ゴールできずに悔し涙を流す選手を目の当たりにしたこともあります。また、大声で先生を応援する生徒の微笑ましい光景や年配の選手が足を引かずながらもあきらめずにゴールを目指す姿など、実際にボランティアとして関わること、心から熱いものを感じることができました。

20年ほど前からボーイスカウトの指導者としてビーバー隊の活動を手伝っています。そのビーバー隊の子供たちが毎年トライアスロン大会の近くになると「しーちゃん。がんばってー!」とまるで選手を送り出すような声援で私を送ってくれます。

いつかこの子供たちの中から、日本海オロロンライントライアスロン国際大会に出場する選手が出てくれることを夢見てボランティアを続けていきたいと思っています。

今年、どんなドラマが待っているのでしょうか。みんなの声援で楽しく大会(8/21)を盛り上げましょう!